

平成二十六年(2014)十一月一、二日

島根県民会館中ホール

第三十八回

島根県高等学校演劇発表大会観劇記



20141212

洲浜昌三

第38回 島根県高等学校演劇発表大会

11/1(土) 10時～

- ①三刀屋高校掛合分校「僕たちのTAKASHI」亀尾佳宏 作
 - ②三刀屋高校「羽と心臓と鎧」竹内万寿 作
 - ③松江農林高校「のうりん日和」多田佳菜子 作
 - ④浜田高校「ごはんの時間2い」青山一也 作 浜高演劇部潤色
 - ⑤松江商業「ホーリーナイト」杉山 恵 作 川口多加 潤色 (～16時50分)
- 17時～17時40分講師講評 (洲浜昌三、大島宏美)

11/2 (日) 10時～

- ⑥開星高校「サヨナラブライド～see you Love Lie' d」武庫次元 作
- ⑦安来高校「逝ったり生きたり」東尾 咲 作 安来高演劇部潤色
- ⑧松江工業「広くてすてきな宇宙じゃないか」成井 豊 作
- ⑨出雲高校「泳げ WATER BABYS」伊藤靖之 作 15時30分終了予定。

15時40分～生徒講評委員会・審査会 (大島宏美 洲浜昌三 岩成紀子 安田礼子 今岡淳子)

16時30～17時20分 講師の講評、審査発表、閉会式

今年は島根で中国地区大会 (12月20, 21日県民会館中ホール) が開催されるので、代表校は3校。安来、松江工業、出雲高校に決定した。とてもすばらしい劇だった。写真撮影は高橋育男先生。舞台風景として使用許可をいただいた。

①三刀屋高校掛合分校

「僕たちのTAKASHI」 (創作)

亀尾佳宏 作



初出場 三刀屋高校掛合分校

全校で五十人弱の学校で演劇同好会をつくり、いろいろなハンディがあるなかで練習し、地区代表になって初めて県大会へ出場。大いに賞賛したい。顧問の熱意なしには不可能なことである。

劇は、雲南市で生まれた永井隆博士のことを知らない演劇部が永井博士の劇を上演しようとする過程と長崎で原爆を受けた博士のことを描いた物語。九月に雲南市創作市民劇場によって、雲南市と益田市で上演され好評だった「TAKASHI」を基に、作者が手を加えたものである。

場面がたくさんあり、構成劇形式の舞台だったが、よく整理され全体のバランスもよかった。前半は、永井博士のことを「知らない」ことに力点が置かれていて、劇の展開が滞った感があるが、後半にいくほど迫力が出てきた。「知らない」ことについては、サラッと流しても十分伝わるのではないかと思った。癖のない自然な喋りや表現には好感が持てた。

・発声や滑舌は初出場にしては癖がなく言葉も聞こえたが、力を抜いたり、普通にも喋ったりすると、声の力も弱くなった。

・自然な演技だったが、まだ遠慮しているところが見えた。・音楽はとても効果的で、劇を引き締めた。雪もよかった。・劇中劇が何力所かあるが、日常との差をもっとつけて演じた方が劇にメリハリがつき引き締まる。

・原爆が落ちた瞬間、スモークが舞台に満ち、全員倒れていき、隆だけが残った。とてもすばらしい表現だった。来年が楽しみです。

②三刀屋高校

「羽と心臓と鐘」 (創作)

竹内万寿 作

・幕開きの最初のセリフから強い印象を受けた。発声や滑舌がすばらしく、言葉に力



部員の意欲的な創作

三刀屋高校

があったからだ。さすが三刀屋高校。伝統がしっかり受け継がれているのが嬉しかった。

ぼくの計算だと、夏の全国大会へ五回、春の全国大会一回、中国大会十一回出場という輝かしい伝統を持つ学校である。この春、顧問が転勤になったので、どうなるか、と心を痛めていた。長い間顧問と部員や卒業生との間で培われてきた期待や信頼があつてこそいい舞台も生まれるからだ。残念だが、教員には転勤は避けられない。

部員の武内さん創作の劇で、若者らしい意欲作だったが、同時に若者らしい抽象的な思考や言葉によって成り立つ舞台でもあった。言葉による説明が多く、動きがそれについていかないところがあちこちにあった。言葉による説明ではなく、行動を先

行させないと舞台は生きてこない。思考と思考、行動と行動のぶつかり合いがドラマを生む。それを言葉で説明したら緊迫感や迫力はなくなる。

意欲作で発想の新鮮さや面白さはいろいろな場面を感じた。同時に、その意気込みや意欲が遊びのない歯車のようにギシギシし過ぎた感ほぐえない。

③松江農林高校

「のうりん日和」 (創作)

多田佳菜子 作

事前に送られてきた脚本を読んで、おもしろかった。学校で実際にやっている農業実習が劇になっているので、あちこちにリアリティがあった。劇の展開はやや平板で、生徒だけの場面になるとダレて停滞したが、実習の先生が登場する度にストリーが動きだしおもしろく展開した。視点の違い、考えの違い、異質な存在などがいないと劇の対立が生まれにくいということなのだろう。素直に描いて温かいものが伝わってくる好感の持てる脚本だと思った。

欲をいえば、何を骨にして(テーマにして)劇を展開するかについて、もっと明確だ

つたら、更に引き締まった脚本になったと思う。(練習の中で修正されたのか、本番ではかなりよく伝わってきたが・・・特に後半から)

・幕開きの BGM のなかで三人のシルエットがきれいで、劇を象徴するかのようだったが、動作があれば更に場面が生きた。

・発声や滑舌はよかった。セリフにスピードもあり、力むことなく喋り、言葉がよくわかった。

・舞台装置は、一見して農場と分かるようにもつと工夫したかった。

・台風一過、稲が倒れ農場が荒れ果てた場面。ホリゾントは全面みどり、高台に四人が黙って立っているシーンは象徴的であった。実習をいつもサボり反抗的だった美果が、「わたしも稲を刈る」と進み出るところでは胸にグツトきた。

・ラスト近くで、先生が日本の農業について語る言葉は普遍性があり生きていた。それを支える身体がそれまでに舞台上で演じられていたからである。

・ラストの群読(群詠?)は蛇足に思えた。それまでの劇をまとめたような印象が残った。みんなで黙々と通れた稲を刈るーそれで終わってもよかった。おわりはいつも難しい。

この脚本は顧問の多田先生の初めての創作。先生は平成十二年に松江農林が上演した『ワラン・ヒア』って何ですかで舞台上立ち、中国大会まで行かれた。それは平成四年に大田高が上演して中国大会まで行った作品で、書いたのは顧問のスハマ ショウゾウくんだった。(ナニガイタイノダ!) ビ サイレント! その多田先生が母校で演劇部の顧問になり、年ごとにすばらしい劇を上演し、ついに創作脚本を書いて後輩の部員たちが上演した!

なんとも言えない感動です。竹のように成長していく姿を見るようです。一人の高校生の人生の軌跡を見ているようです。**地域の身近な素材で普遍的な作品を書くー**これはぼくの願望です。「のうりん日和」にはその芽がしっかりと覗いていました。

残念ながらこの作品を最後に、作者の舞台は永遠に(多分) 見る事ができないよう



身近な農業実習を素材にさわやかな舞台 松江農林高校

④ 浜田高校

「ごほんの時間い」

青山一也 作 浜高演劇部潤色

です。さわやかな舞台をありがとう。島根の高校演劇への貢献、忘れません。謝謝。

久しぶりに浜高らしい舞台をみる事ができた。浜高らしいって何だ?と問われて簡単に答えるのは難しいが、簡単に答えないとスペースがないので長々と書くわけにはいかなないので簡単に書く(変な文章!)

動きや演技に無駄がなくシャープでリアリティがあり洗練されている(ちよつと言いつつ過ぎたかな)。セリフに癖がなく自然で、スピードがあっても言葉がよくわかる。キャストが自信を持って舞台上に立っている(感じがする)。

ひと言でいえば、「自然な劇作り」といえるかもしれない。

今回の劇は机と椅子だけ。女性徒五人と男子生徒二人。女性徒は昼食時に好き勝手なお喋りをする。面白おかしく意味がありそうで、つまらぬ会話がつづく。それが進路の問題になり後半になると、ちよつと深刻な内容が浮かび上がる。お笑いのように見えて毒と風刺と深刻な問題が内蔵されている。作者は群馬の高校演劇の顧問。

・会話劇でストーリーの展開が見えない退屈なところが多いが、個々の人物の個性を生かして生きた舞台につくりあげた。特にボクサー志望という宇宙、主夫志望だというオドオドした吉田のキャラをうまくつくりあげて、劇を引き締め、観客の笑いも引き起こした。**劇ではその役を研究しそれに徹することが、少なくとも最低条件だと改めて感じた人も多かったにちがいない。**

顧問の伊藤先生は母校の矢上高校へ。以前江津高校でも演劇部顧問をされていた神山



伝統復活 石見で唯一の演劇部 浜田高校

先生が顧問になられた。先生は以前、江津高校で顧問をされていた。退職して浜高へ講師として行っておられる。演劇部再興マン、伊藤先生が矢上で演劇部を復活させられるかどうか。瀬摩高でも浜高でも再興人でした。大いに期待しましょう！

⑤ 松江商業高校

「ホーリーナイト」 杉山 恵 作 川口多加 潤色



創意工夫 伸び伸びとした楽しい舞台 松江商業高校

「演劇部員は何人ですか」と聞いたたら、「三九人います」と顧問の石津先生。びっくりして、「どうしてそんなに増えたんですか」と聞き返した。「地区の合同公演などを見て劇の楽しさを知り、やってみたくてという生徒が増えてきたんですよね」という返事。「愛と地球」など子どもたちも含めた市民参加の演劇活動が果たす影響も大きいにちがいない。なにより、松商の部活動が楽しく充実しているから部員が集まるのは間違いないが、長年にわたる松江地区の協力体制が生み出した効果は大きい。

部員が少なくと苦労する。多いと別の苦労が生まれる。全員に演劇活動の充実感を体験させないと教育活動としての役割が果たせない。いきおいクロスやその他大勢を増やすことになる。その結果、劇としての濃密度は薄くなりかねない。教育優先か舞台か。顧問はこの狭間で常に苦闘している。この舞台を観て、思わず余分なことを考えてしまった。

出だしの音楽、猫の登場、「うまい！」とメモしている。発声や滑舌もよく、言葉がしっかりしている。十五匹の猫の踊り、「壮観、美事！」とメモしている。歌もうまい。衣装委はそれぞれの個性が出るように工夫しており、それによって舞台が華やかになった。歌も踊りもすべてみんなで考えて作ったという。その創意工夫が生き、楽しんで演じてい喜びが伝わってきた。飽きることなくとも楽しく観劇した。

コンクール形式でなければ、これ以上付け加える必要はないのだが、劇として他校と比較し、批判的に見れば次の点が指摘できるだろう。「主人公のあきらと猫のホーリーの悲しみをきれいに絵取っていて、額縁がきれいすぎ、掘り下げてないので、心を打つというより、うまかったね、という気持ちが残る」

一般市民や、園児、小中学生を対象に上演すると、更に楽しく観て感動してくれるだろう。それはとても価値のある劇である。

⑥ 開星高校

「サヨナラブライド〜see you Love Lie,d〜」

武庫次元 作

場面は喫茶店。明日結婚式を行うために店主の修やアルバイト、友達などが準備をしている。短い台詞で面白おかしい会話テンポ良くつづく。店主は何となく陰があり、だんだん原因が明らかになっていく。結婚式の当日、花嫁に逃げられたおだ。作者は兵庫県の武庫荘総合校の演劇部顧問。お笑いを振りまきながら、最後に涙を頂戴、という

構造で、よくできている。(涙はでなかったが、「素直な気持ちを伝えるのは大切」というテーマはよく伝わってきた。



素朴で飾り気のない温かい世界 開星高校

軽快な音楽で幕が開くと、白布の掛かったテーブル、色彩豊かな花などがあり、簡潔だがきれいな舞台が浮かび上がる。主人公の修さんの声には深い響きがありとても魅力的。好人物の雰囲気よく出ているが、必要な場面で思い切った鼓を破って演じれば劇として迫力がでたにちがいない。ちよつと遠慮していた。その他の人たちも、それぞれ素直に演じている。どこかにやや控えめで未消化なところが覗く。うまく演じようと無理をしないところが魅力といえれば魅力でもある。人物関係

によって話し方の違い、人物との距離による声の高低、大小、目線の位置などちよつとしたところに意識化されないものが覗えた。多分時間が足りなかったのだろう。
表現に未消化で不確実なところはあつたが、まとまった温かい世界が気持ちよく伝わってきた。

⑦安来高校

「逝つたり生きたり」 東尾 咲 作 安来校演劇部 潤色



二人だけで喋り動き回り大熱演 安来高校

お客さんを退屈させずに、二人だけで一時間舞台に引き付けるのは大変なことである。しかもこの劇ではおもしろいストーリーがあるわけではない。お笑い特有のどぎついセリフや意味がありそうで何のことか不明なやりとりが途切れることなく洪水のようにつづく。しかも二人で広い舞台を動き回つての会話。身体を鍛えエネルギーがないとつづかない。それを錦織さんと山本さんはやってのけた。誰もが感心したにちがいない。二人ともヒップホップを習っているというから出来たのだろう。

この脚本は大谷高校演劇部員・東尾さんが創作した異色作で、二〇一一年に丸亀市で開催された

全国大会で上演された。安来高校はそれを少し出雲方言も加味して潤色した。冒頭のセリフから意表を衝く。「どうも、さつき校舎から落ちちやつたばかりのたかこです」。どういう表情や気持ちで喋り、どんな動きを舞台ですればいいのか。重傷なのか、軽症なのか、遊びなのか、冗談なのか・・・それによって劇の内容が左右される。安来校の解釈と演出では、冗談、と受け止めた人が多いのではないだろうか。すぐ、ベッドに伏した友人のしおが「うりゃー！」と大声をあげ、「身体につながれた管を引きちぎり鬼の形相で駆けてくる」。しおは、集中治療室でたくさん管をつけ

て瀕死の状態なのである。出会った二人は、いい加減な冗談や軽口をたたきながら追いかけて逃げたり取っ組み合いをしたりして、舞台を動き回る。

題名からわかるように、二人は「死んだり生きたり」の境界を行き来している状態である。しかしセリフや動きは生き生きとしている。常識の逆をいく。正に異色作品である。意外性にあふれている。この劇で何を伝えたかったのか。

「いま生きていることのすばらしさ」を伝えたかったという。初めてこの劇を観た人に、それが果たして伝わったかどうか。大熱演は確実に伝わった。それは異論ないだろう。しかし、「いま生きているすばらしさ」を伝えるためには、「死んでいく虚しさもどこかで暗示しなければ、片面しか伝わらないのではないだろうか。悲劇でも喜劇でも、陰と陽の深さがないと二面的、平面的になる。脚本解釈と演出の問題である。」

⑧松江工業高校

「広くてすてきな宇宙じゃないか」 成井 豊 作



舞台装置が劇を立体化、個性を生かし伸び伸び 松江工業

一時、キャラクターボックスブームがあつて、高校演劇でも成井作品がたくさん上演された。演じる側は役作りが面白く楽しい、観客も楽しく笑いながら観て面白い。発想が奇抜、自由で荒唐無稽なストーリーのようで組み立てが絶妙で最後には感動を与え身近な問題として考えさせる。

この劇も何回か観たが、今回の舞台に最も納得がいった。それは劇にすつきりとした統一感があつたからである。その統一感は装置が引き出した。舞台の中央に大きくて高い台を作り、台の左右に階段を設けて昇降できるようにし、台の中段が二人のニュースキャスターの放送席として使われた。

台の一番上は演じる舞台にも使われた。今までに観た例では、二人のキャスターの放送席は上手の奥にあった場合が多い。そこは死角で、ニュースキャスターは劇の中心ではなく副次的存在になる。今回は中央の一番目立つ場所ですキャスターが喋ったから、これが劇をリードした。大きな台がドカンと中央にあることによって、重要な家庭の場は犠牲になり、台の前で家庭の場面を演じなければならなかったが、その犠牲は十分報われたと思う。**舞台装置は、劇の何をさせるかを大いに左右する。**

アンドロイドのおばあちゃんが派遣されて来たことに反発ばかりしていたクリコ。そのクリコを捜して東京中を走り回る。ビルの屋上でやっと思つて見つける。

「東京だって、こんなに暗くなれば、こんなに星が見えるじゃない。星の光がこんなにあれば、あたしは死なない。クリコちゃんを一人にはしない。ごらんなさいよ。広くてすてきな宇宙じゃないか」。この感動的なセリフが高い台の上で演じられる。

六十年たって、おばあちゃんに会いたくなくなりERS のヒジカタに電話すると、おばあちゃんはやって来る。日傘をさして、トランクを持って。

クリコがおばあちゃんへ尋ねる。

「どうして屋上に来られたの？階段はなかったのに。エレベーターは止まっていたのに。」

「おばあちゃんは何なんでもできるのよ。クリコちゃんのためなら」

このテーマに触れる大切なセリフが、一番目立つ台の上でスポットを浴びて交わされる。何を伝えたいか。そのためにはどんな演出をするか。どんな舞台装置にするか。そのことをよく理解して創られている。

演出はおばあちゃんも美事に好演した三須さん。昨年は「流るる舟は」を創作し演出し演じた。今もその舞台ははつきり脳裏に浮かぶ。昨年、今年を通して劇を観て才能を感じた。

その他のキャストも松江工業らしくいい演技だった。松江工業らしい？どういうこと具体的に言えよ！

うううん……登場人物を思いきって造形し、その役を伸び伸び楽しんで演じ（たまにやり過ぎて遊びすぎることあり）ているので、観ていてもすつきりする。（舞台に立つ者が遠慮して演じると観客は身が縮み開放感がない）数年前から舞台装置つくりがとてもうまい。劇があまりよくないときには、劇つくりが荒削り……等々。

⑨ 出雲高校

「泳げ WATER BABYS」 伊藤靖之 作



独創的で楽しく、力感と感動のある舞台 出雲高校

二年連続して全国大会へ出場した出雲高校。部員や顧問にも大きなプレッシャーがかかるにちがいない。毎年、伊藤先生の創作だが、受験校として校務も過密な中での創作や指導は大変だ。人ごとではない。

今年はどうな作品かと楽しみにして台本を手にした。台本が行き届いている。場面毎にタイトルがあい、「あらすじ」「伝えたいこと」もしっかり書いてある。斬新で独創的な世界を取り上げている。生まれる前の胎児たちが登場するのだ。場はどうするか？、動きは？、衣装は？会話は面白く意表を衝き新鮮だった。場によって劇が決まると思った。

実際に舞台を観たとき、**箱、ブルーシート、キャスター付きの箱なをうまく使って演じたので、抽象的な世界も具体になり、劇にとてもダイナミック力感が生まれた。**この装置や小道具がなかったら、この劇はとても分かりにくかったにちがいない。（人によってはこの具体性が遊びに近い粗削りな表現に見えたかもしれない）

今までも独創的で、どこかPoeticで、ユーモアと風刺、言葉遊びがあり、エピソードの累積手法で、どこか抽象的で、いま一つ理解を拒むところがあつたが、今回の劇は場によってその抽象性がかなり具体的で身近なものになった。

ラストでは、未熟児として死産になり母に会えないかも知れない胎児の水野がスタート台に立ち、みんなが、「よーよーい！」と声を掛け綴帳が下りる。強く胸を打つものがあつた。見終わった時、濃密な充実感があつた。

（以上です。すべて洲浜の感想です。人が違えば真反対の感想もあるかもしれませんが。そのつもりで読んでください。あくまで参考になればと思つて書きました。調べたりして書きますので一校書くのに一時間以上はかかります。写真は舞台風景として了解を得て使用しました。20150319 洲浜）